

定年を迎えて

内藤博夫

昭和39年8月末に東北大学に着任して以来、40年近くを教職の仕事に就いてきた。東北大学は5年半の比較的短期の勤務だったが、お茶の水女子大学には34年間お世話になった。ずいぶん長い期間のように思えるが、自分にとってはそれほどではない。つい昨日のように思い出せる事柄もある。定年を迎えて自分の過去を振り返ってみた。資料をひっくり返してみると、すっかり忘れていたことがよみがえってくる。まだ若かった頃はいろいろなことをやっていたことがわかる。あらためて時間の長さを感じた。結局のところ短くもあり、長くもあったということである。

ではこれまでに自分は何をしてきたのかと自問してみると、残念ながら自慢できることはほとんどない。あるのは物足りなさや不満な点ばかりである。率直に言ってみればやり残してきたことがたくさんある。65歳を過ぎると統計上は老年人口、つまり老人に数えられる。近年は高齢化社会のことがさまざまな角度から論議されるようになった。歳をとればとるほど体力・知力が衰えていくのは自然の法則だ。自分も老人の一員になったとすれば、これまでにやり残してきたことにどのように向き合っていくのか、課題は大きい。ただし退職後に生まれる時間的余裕を利用して、これまで先送りしていた専門外の書物を読むことにも取り組んでみたいと思っている。

東北大学に勤めていたときは、仙台の街や東北各地の風土に魅せられたこともあって、東北地方をフィールドにした研究をしてみようと考えていた。お茶大に移ることが決まってからもしばらくは東北研究を続けるつもりでいた。当時購入した書物を見ると東北の歴史や地理を論じたものが多く、東北への関心が強かったことがわかる。しかし東京での生活は東北地方に出かける時間の余裕を奪ってしまった。お茶大における公務（授業や会議）の量は東北大にいた頃と比べればはるかに軽減されていた。東北大時代は地理学教室の仕事のほかに東北地理学会の仕事があり、かなり忙しい毎日だった。当時東北地理学会には専任の書記もない状態で、教室の助手が分担して雑務を処理することになっていたからである。仙台から東京に勤務先が移って生じた変化の中で、通勤時間の変化が大きい。仙台では下宿先から大学まで片道30分でもよかったが、東京に移ってからは自宅から大学まで片道2時間近くかかるようになった。おそらくこうした負担の増加が原因となってフィールドは交通条件のよい関東地方および中部地方の地域・地区に移っていった。地理学を専攻する者としてこの選択が適切であったかどうか、今でも考えてしまうことがある。それはさておき、お茶大では工業や人口の地理を勉強する機会が与えられた。まじめで優秀な学生に接することができたことも幸いであった。

在外研究員に選ばれたことでアメリカ・イギリスに滞在する機会を得たことも忘れがたい思い出である。それまで中国など、海外へ出かけたことはあるが、いずれも旅行の域を出るものではなかった。在外研究ではシアトルに6ヶ月、ロンドンに4ヶ月滞在し、それぞれの国で生活することになったのである。シアトルでは郊外にあるアパートに入居し、自炊生活をはじめた。近くにスーパーマーケットがあり、そこにはオリエンタル・コーナーがあってお米も味噌も売っていた。日本食に不自由することはなかった。炊飯器もシアトルで買うことができた。アメリカは開かれた国という印象を受けたのはこのときである。ロンドンではInternational Students Houseに居を定めた。この施設は王室の支援も得て民間団体が経営しているもので、世界各国からきた留学生が入居していた。学生でない身分の者は私とニュージーランドからきた60歳ぐらいの大学教授の方の二人だけだった。ここでは自炊は禁止されていたので食事はこの寮の食堂ですますこととした。国際色豊かな寮生活はシアトルでの生活とは違った趣をもっていた。アメリカとイギリスは歴史的文化的に深いつながりを持つ国であるが、それぞれが特徴をもっていることを実感することができた。

最後に在外研究を含めてこれまで研究・教育の機会を与えて下さった皆様に、そして私を支えて下さった皆様にこの場を借りてお礼を申し上げたい。